

竜神平遺跡

—長野県塩尻市竜神平遺跡発掘調査報告書—

1990

塩尻市教育委員会

りゅう じん だいら
竜 神 平 遺 跡

—長野県塩尻市竜神平遺跡発掘調査報告書—

1990

塩尻市教育委員会

序

竜神平遺跡は長野県畜産試験場の南隣りの尾根にあり、市内一円を展望できる非常に恵まれた環境にあります。これまで遺跡としてはほとんど知られていませんでした。折りしも昭和60年に中央道長野線が、また翌61年には畜産試験場内整備事業が当地に掛かったことを機に新遺跡として発見され、緊急発掘調査により縄文時代早期から中期にかけての遺跡であることが明らかになりました。この度、遺跡地に広がる畑地の造成により最後に残った区域が消滅することになったため、地権者である内山勝敏氏の御好意により、工事施行に先立ち市教育委員会が発掘調査を行ない、記録保存をはかることになりました。

発掘調査は春風さわやかな4月中旬から下旬にかけて行なわれましたが、おかげさまで作業も順調に進み、その結果、数多くの遺構・遺物が確認され、今後該期の研究を進めるうえで極めて貴重な資料を提供することになりました。

終わりにあたり本調査に御理解、御協力下さいました内山勝敏氏はじめ、作業に献身的に御協力いただいた地元の方々など関係各位に衷心より敬意と感謝をささげる次第であります。

平成2年1月

塩尻市教育委員会

教育長 小松 優一

例　　言

1. 本書は、塩尻市の東部、片丘南熊井地籍に所在する竜神平遺跡の平成元年度に行なわれた発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、竜神平遺跡発掘調査団（団長 中島章二氏）に委託し、現場での調査は平成元年4月12日から4月26日まで行なった。
3. 遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、平成元年5月から平成2年1月にかけて行なった。作業の分担は次のとおりである。
遺構…整理、トレース：鳥羽。
遺物…実測、拓本、トレース：小林、鳥羽。
写真…鳥羽。
4. 本書の執筆分担は次のとおりである。
第Ⅰ章、第Ⅱ章、第Ⅲ章、第Ⅳ章……………鳥羽嘉彦
第Ⅴ章、第Ⅵ章……………小林康男
5. 本書の編集は鳥羽が行なった。
6. 縄文時代早期押型文土器の資料については、会田 進氏の御指導を得た。銘記して感謝申し上げたい。
7. 第5号集石炉出土炭化材資料の材同定および¹⁴C年代測定については、パリノ・サーヴェイ株式会社へ依頼した。
8. 本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序		
例 言		
第Ⅰ章	調査状況.....	1
第1節	発掘調査に至る経過.....	1
第2節	調査体制.....	1
第3節	調査日誌.....	2
第4節	遺跡の状況と面積.....	3
第Ⅱ章	遺跡周辺の環境.....	4
第1節	自然環境.....	4
第2節	周辺遺跡.....	5
第Ⅲ章	遺跡の概要.....	7
第1節	遺跡の概要.....	7
第2節	発掘区の設定.....	7
第Ⅳ章	遺構.....	9
第1節	住居址.....	9
第2節	集石炉.....	12
第3節	小豎穴.....	16
第Ⅴ章	遺物.....	22
第VI章	まとめ.....	30
付 章	竜神平遺跡第5号集石炉出土炭化材の材同定および ¹⁴ C年代測定報告.....	31

第Ⅰ章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

昭和63年10月13日、竜神平遺跡の存在する尾根状台地の地権者、内山勝敏氏より市教委へ個人が行う畑地造成に伴う埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。ここは尾根の先端部が中央道長野線に、また尾根上方部が長野県畜産試験場の整備事業にかかり、それぞれの事業に先立つ緊急発掘調査により多大な成果を納めた遺跡である。さっそく市教委の小林、鳥羽は内山氏の案内のものと現地調査を行い、後日、県文化課の現地指導により翌春、事業に先立ち緊急発掘調査を実施することにした。

平成元年4月11日 市教委は竜神平遺跡発掘調査団（団長 中島章二氏）を組織する。

4月12日～4月26日 現地における発掘調査。

5月12日 竜神平遺跡発掘調査終了について（届）

5月12日 竜神平遺跡埋蔵文化財の拾得について（届）

10月2日 竜神平遺跡埋蔵文化財の文化財認定について（通知）

発掘調査実施計画書（一部のみ記載）

2. 遺跡名 竜神平遺跡

4. 発掘調査の目的及び概要 開発事業個人畑地造成工事に先立ち300m²以上を発掘調査して記録保存をはかる。

5. 調査の作業日数 発掘作業7日 整理作業7日 合計14日

6. 調査に要する費用 1,030,000円

7. 調査報告書作成部数 300部

第2節 調査体制

団長 中島 章二（塩尻市文化財調査委員長）

担当者 鳥羽 嘉彦（長野県考古学会員、市教委）

調査員 小林 康男（日本考古学協会員、市教委）

市川二三夫（長野県考古学会員）

参加者 小沢甲子郎、川上奈美江、小松幸美、小松義丸、小松静子、小松貞文、小松礼子、
桜井洋子、高橋鳥億、高橋阿や子、手塚きくへ、中村洋子、中野やすみ、藤松謙一、
松下おもと、村山 明、山口伸司、吉江みより。

事務局	塙尻市教育委員会教育長	小松 優一
	市教委総合文化センター所長	寺沢 隆
	〃 文化教養担当課長	横山 哲宣
	〃 文化教養担当課主幹	大和 清志
	〃 平出遺跡考古博物館館長	小林 康男
	〃 平出遺跡考古博物館学芸員	鳥羽 嘉彦
地権者	内山勝敏	

第3節 調査日誌

- 平成元年4月12日（水）曇 調査区内6ヶ所に試掘坑を入れ、表土の堆積状況を調べる。
- 4月13日（木）快晴 調査区西端からバックホーによる表土除去。北側で20cm、南側で40cmの厚さで削平。一部ローム面まで耕作による削平が及んでいたが、全体的には比較的良好な保存状態で、小豊穴らしき落ち込みを多數検出。
- 4月14日（金）晴 昨日に引き続き重機による表土除去。器材搬入。周辺の表面踏査。
- 4月17日（月）晴 本日より発掘作業開始。事務局より挨拶および発掘日程、作業方法等の説明があったのち、器材準備、テント設営。調査区西側よりショレンによる遺構検出作業を開始する。繩文土器、フレーク、石鏃が出土する。風が強い一日だった。
- 4月18日（火）快晴 昨日に引き続き検出作業。集石炉がと思われる集石を10数基検出。付近から抉状耳飾、石鏃、打製石斧、繩文早期押型文、中期土器が出土。5m間隔でクイ打ちをし、北から南へA-E、西から東へ1-15のグリッドを設定。
- 4月19日（水）快晴 集石炉数基確認。楕円文、山形文等の押型文数片出土。発掘地遠景写真撮影。暑い一日だった。
- 4月20日（木）晴 遺構検出作業を午前中終了し、午後、遺構の掘り下げを始める。D-5の住居址らしき落ち込みの覆土からは早期の押型文が出土したため、南北ベルトを設定し、丁重に掘り下げを行なう。A-13の落ち込みは覆土が浅く、すぐに堅い床面が現われる。床面に多量の炭化材が認められた。集石炉の精査を始めたところ、押型文土器数片が出土する。
- 4月21日（金）快晴 集石炉1号～4号、10号、12号平面図測定。1号～4号、6号～11号写真撮影。小豊穴1号、2号セクション図化。第1号（D-5）、第2号（A-13）住居址掘り下げ。
- 4月22日（土）、23日（日）定休日。
- 4月24日（月）曇のち雨 第1号住居址、セクション図化、遺物取上。小豊穴3号～7号セクション図化。集石炉全体写真撮影、6号～9号、11号平面図測定。暴、降雨のため作業中止。
- 4月25日（火）曇 第1号～3号住居址、床面精査、写真撮影。集石炉1号～4号、6号～12号セクション図化。5号平面図測定。小豊穴8号～30号セクション図化、1号～8号平面図測定

図。

○ 4月26日（水）壘 第1号～3号住居址平面図測図。集石炉5号、13号セクション図化。小豎穴9号～31号平面図測図。集石炉平面図測図。全体図測図。全体写真撮影。器材撤収。本日をもって現場における発掘作業を終了する。

整理作業は5～1月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土品、記録類の整理、報告書の図版作成、原稿執筆作業。

第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
竜神平	塩尻市大字片丘 10,994番地	畑地	包蔵地	2,500m ²	2,500m ²	300m ²	1,100m ²	1,030,000円

第1表 発掘調査経過表

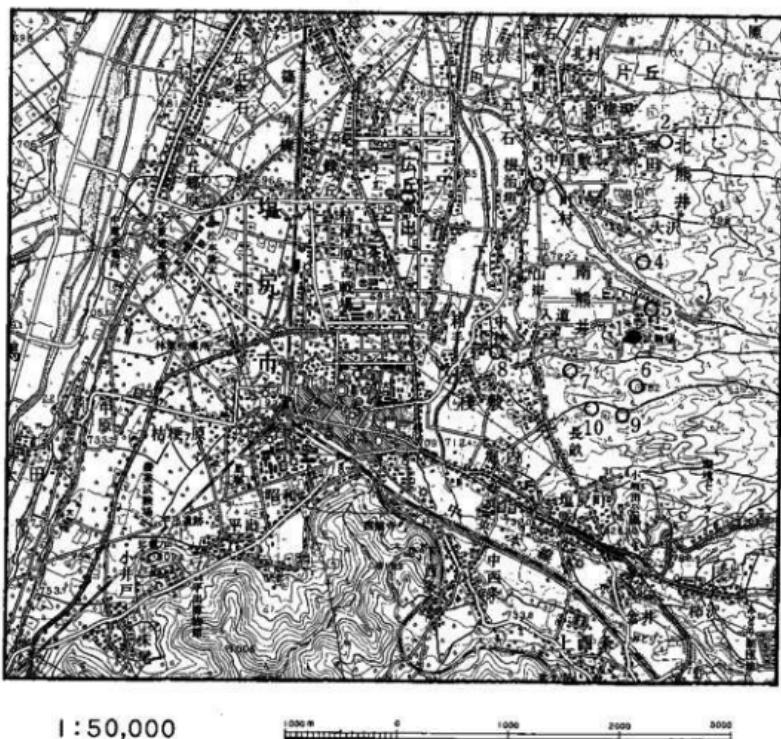
月 遺跡名	4	5～1	主な遺構	主な遺物
竜神平	12 26 	遺物整理 図面作成 原稿執筆	縄文時代早期住居址 2 縄文時代住居址 1 集石炉（縄文早期、中期）13 小豎穴（縄文早期、中期）31	縄文時代 土器、石器 装身具

第II章 遺跡周辺の環境

第1節 自然環境

竜神平遺跡は塩尻市の東部、片丘南熊井地籍にあり、現在、県畜産試験場が建つ台地と、中央道長野線塩尻インターが広がる台地にそれぞれ南北を挟まれた東西に延びる複数根上に展開する。

ここは高ボッチ山塊の西麓斜面に発達した片丘陵上にあり、平均勾配6°の急斜面を西へ向けている。このため山麓から流下する数条の河川による開析は著しく、台地縁から断崖をもって沢



第1図 遺跡位置図
1. 竜神平 2. 脱屋敷 3. 上木戸 4. 煙原 5. 山ノ神
6. 高山城跡 7. 向阳台 8. 中抜 9. 宮の前 10. 福沢

第1図 遺跡位置図

に臨む場合が多い。またこれらによって形成された台地上には、群小の河川により幾多の小扇状地が形成されており、複雑な複合扇状地形の形態を示している。

竜神平遺跡の立地する尾根状台地は、これらの沢によって形成されたものであるが、現在は上方に所在する畜産試験場の場内整備により両谷に表流水はみられない。

発掘地点は尾根の先端に位置し、後方が造成により崖を形成しているため、現在は島状の高台となっている。やや西へ傾斜した日当たりの良い斜面で、遺跡の立地としては好条件を有している。

発掘区を設定した台地上には、厚いローム層を基盤として上位に黒褐色壤土（表土）が被覆している。表土は尾根軸で約20cm、調査区南端付近の斜面で約50cmの厚さを測る。河川との比高差があるため、流水の影響はほとんど被っていないが、耕作による搅乱はみられ、とりわけ東側は著しい。

第2節 周辺遺跡

前節で述べたようにこの付近には山麓から流れ下る群小の河川により開析を受けた尾根状台地が発達しており、これらの台地上は良好な遺跡立地の条件を提供している。以下、本遺跡の周辺に分布する遺跡について概観してみたい。

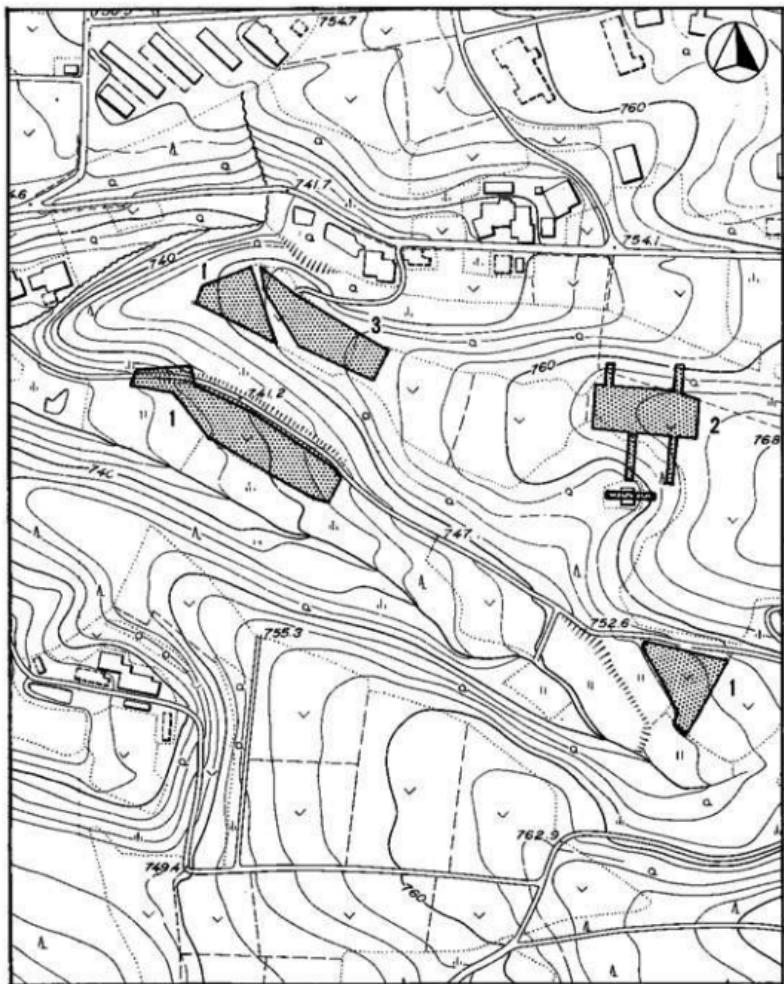
北隣りの台地には現在、長野県畜産試験場が設けられているが、ここには山ノ神遺跡が展開している。過去3度の発掘調査が行なわれており、昭和32年には縄文中期の住居址2軒の他、先土器時代の黒曜石ブロック1箇所が検出されている。さらに昭和62年の東山山麓線関連では縄文中期の小豊穴が検出されたが、長野県史には他に縄文早期、後期、平安時代の採集遺物が記載されている。

畜産試験場と大沢を隔ててさらに北隣りの台地には現在、林間工業団地が建設中であるが、この台地の先端には慰原遺跡が広がっており、縄文中期の住居址147軒からなる環状集落跡と平安時代の住居址19軒が発見されている。台地上の別の小斜面には菖蒲沢窯跡が存在し、奈良時代の登り窯と瓦塔が出土している。

次に南隣りの台地に目を転じると、ここは現在、中央道長野線塩尻インターが広がっているが、インターのトランペット部は竜神遺跡となっている。中央道関連の調査では縄文前・中・後期の遺物が出土している。

この台地を市街地の方へ降りた先端には向陽台遺跡があり、バイパス関連で行なった調査では縄文早期の住居址4軒、礎石炉4基、縄文前期の住居址4軒、弥生後期の住居址6軒、方形周溝墓1基が発見されている。

片丘陵はこの他にも多数の遺跡が分布しており、松本平でも有数の遺跡稠密地帯となっている。



1. 昭和60年発掘地区(中央道関連)
2. 昭和61年発掘地区(畜産試験場関連)
3. 平成元年発掘地区(今同)

第2図 調査地区図

第III章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要

今回発掘調査の対象となった竜神平遺跡は、塙尻市の東部、片丘南熊井地籍にあり、現在、長野県畜産試験場の施設台地と、中央道長野塙尻インターの広がる台地に挟まれた瘦尾根上に存在する。ここは昭和60年に中央道長野線開通で、また61年には畜産試験場整備事業開通で発掘調査が行なわれており、今回はそれらに取り囲まれた1.100m²を調査対象とした。

調査の結果、遺構としては縄文早期の竪穴住居址2軒、時期不明縄文住居址1軒、縄文早期・中期の集石が13基のほか、縄文早期・中期の小竪穴31基が発見されている。これらの遺構の大部分は縄文早期押型文期のものであり、西側に隣接する中央道長野線の発掘成果とはほぼ一致している。

出土した土器には縄文早期立窓式と中期初頭の梨久保式があり、また石器としてはやはり同時期のものと考えられる石鎌、スクレイバー、ピエス・エスキーユ、打製石斧が出土している。

以上、概略を記したが、詳細については他章を参照してもらいたい。

(参考文献)

塙尻市教育委員会(1987)：『竜神遺跡』—長野県畜産試験場整備事業発掘調査報告書

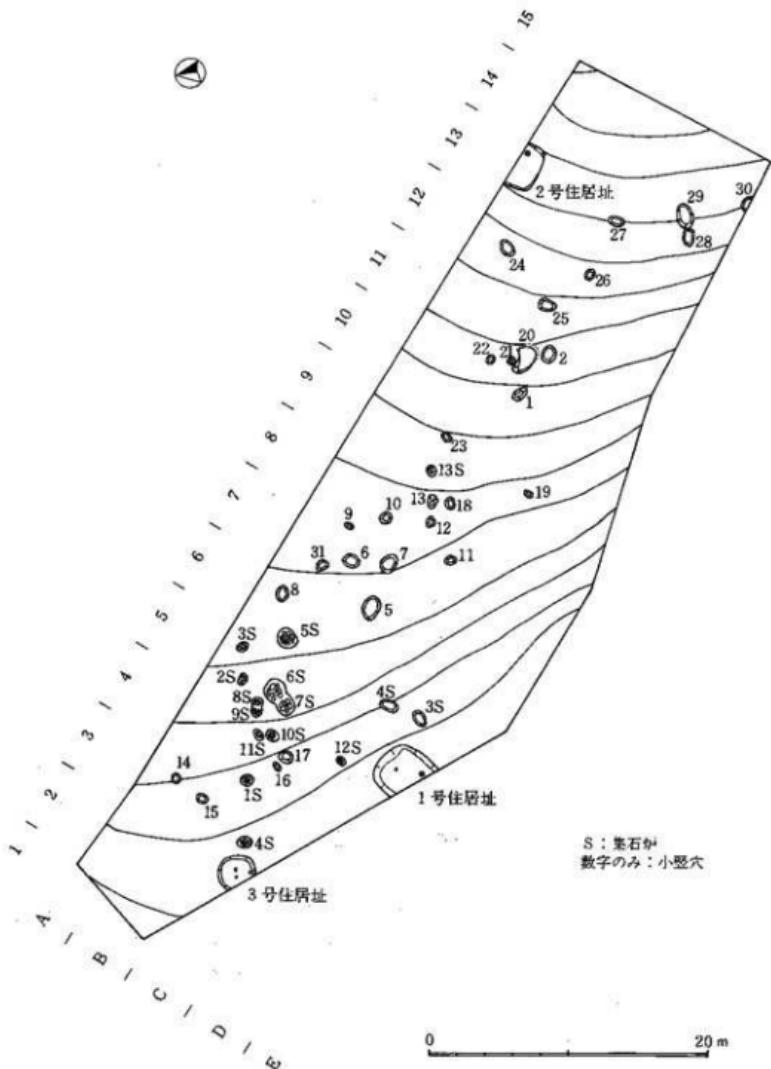
長野県埋蔵文化財センター(1988)：『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2』

第2節 発掘区の設定

今回、整備の対象となった区域は、前述したように先端と後方が削り取られ島状になった尾根状台地の上面であり、尾根方向で130mを測る。しかしこのうち東側半分についてはすでに耕作による攪乱がローム面まで及んでおり、遺構の残存する可能性がほとんどないため、西側半分の調査となった。

発掘区は、最大幅が東西70m、南北20mを測り、総面積1.100m²である。

調査はバックホーによる表土の除去作業を行なった後、グリッドを設定した。グリッドは5mの間隔で、北から南へ向かってA~E、西から東へ向かって1~15を設定した。なおグリッドの方向は尾根方向に対して付けたもので、方位とは無関係である。



第3図 竜神平遺跡全体図

第IV章 遺構

第1節 住居址

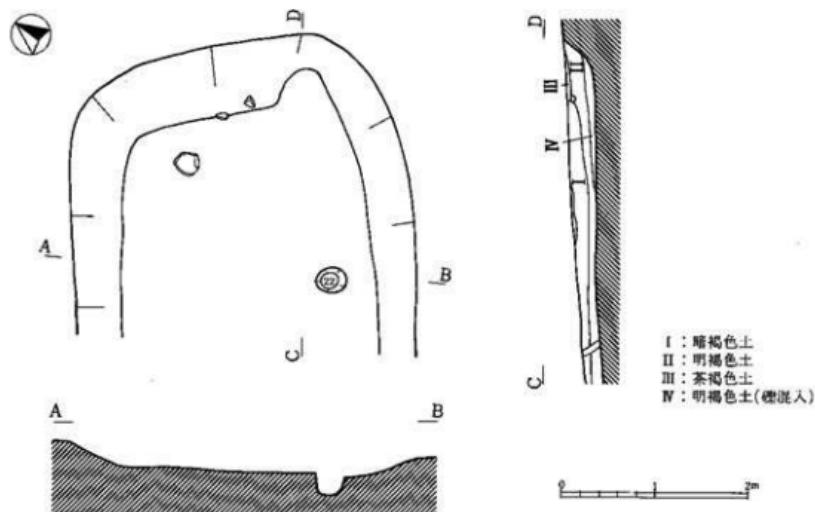
第1号住居址

本址は調査区南側のD-E-5グリッドに位置する。南側が調査区外となるため、住居址の一部(南壁部)を検出することができなかった。

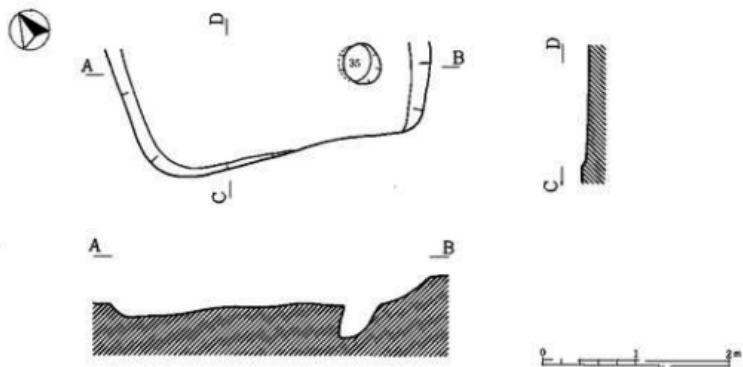
住居址の全容が検出されなかつたためプランは容易には把握できないが、確認された壁より推して隅丸方形もしくは隅丸長方形の平面形態を呈すると推察される。規模は東西370cm、南北350cm以上を測り、軸はN-47°-Wを指す。

壁は傾斜があるが、深くて良好な面を有し、壁高は東壁29cm、西壁48cm、北壁40cmを測る。東壁と西壁の壁高差は主に地山の傾斜によるもので、西から東へ傾斜している。住居址縁での両者の比高差は20cmである。

床はよく踏み固められ堅緻である。北半分はほぼ水平であるが、中央から南側へかけて緩い下降傾斜を有する。柱穴は中央東寄りに1基検出された。深さは21cmあるが傾斜があり、あまりよい掘り方ではない。他に炉、周溝等の施設は確認できなかつた。



第4図 第1号住居址



第5図 第2号住居址

なお本址の北隅床面上に径28cm大の礫が1個貼り付いていた。上部が扁平であり注目したい。

第2号住居址

本址は調査区の東側にあり、北側が調査区域外となるため南半部のみの検出となった。助簾による遺構検出作業の際、比較的広範囲な黒色土の落ち込みがあり、掘り下げたところ硬い床面を発見し住居址と断定した。なお落ち込みは住居址の南側まで広がっており、かなり耕作による擾乱が影響しているように思われた。

プランは隅丸方形の平面形態を呈し、N-26°-Eの軸を持つ。規模は測定可能な東西方向で350cmを測る。

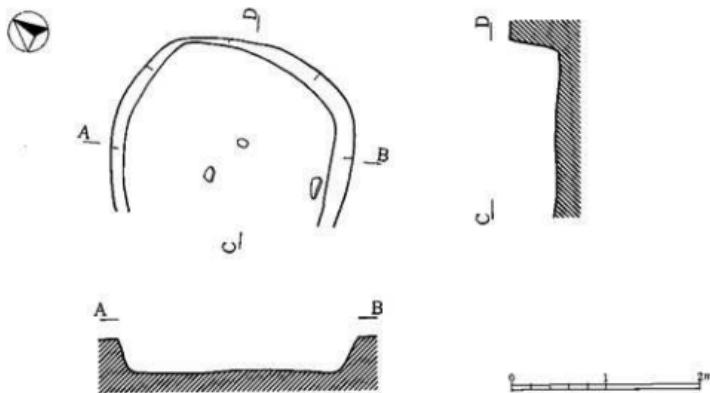
壁はほとんど比高差をもたない貧弱なもので、南壁の東側半分は消滅している。壁高は東壁20cm、西壁12cm、南壁5cmを測るのみで前述したように表上の削平が及んでいることを示している。

床は僅かに西側へ傾斜しており起伏が著しい。部分的に堅緻な床面が残存しているが、概して軟弱な床である。柱穴は東側に1基あるが、傾きが外向でやや疑問が残るものである。他に炉、周溝等の施設は検出できなかった。

第3号住居址

本址は調査区西側のC-2・3グリッドにあり、南側が調査区外となるため、南壁を一部検出できなかった。他住居と比べてこの周辺はほとんど擾乱がなく、このため比較的容易に検出することができた。

プランは南側を欠くため推測の域を出ないが、およそ円形の平面形態を呈し、径は約260cmと比



第6図 第3号住居址

較的小形の住居址である。

壁は垂直に掘り込まれた良好な面を有し、壁高は東壁38cm、西壁37cm、北壁51cmを測る。

床面は水平平坦で、よく踏み固められている。図では住居址内に数点の轟がみられるが、これらは床面から若干浮いており住居址との関連は不明である。

床面においては、炉、柱穴、周溝等の施設がまったく検出されなかった。

第2表 住居址一覧表

住所	グリッド	平面形	方 向	規 模	壁 高	炉	周溝	主柱穴	切合い 関 係	時 期
1	D・E-5	隅丸方形	N-47°-W	370×(350)	29-48-40	-	なし	不明	-	縄文早期
2	A-13	隅丸方形	N-26°-E	350×—	20-12-5-—	-	なし	不明	-	縄文早期
3	C-2-3	円 形	-	260×(200)	38-37-51	-	なし	不明	-	

第2節 集石炉

ここで取り上げる集石炉とは、焼けた礫が多数集合している状態のものをいい、覆土中に介在する礫が焼けていなかったり（第14・15号小竪穴）、礫を伴わない掘り込みについては除外した。従って、元々集石炉であっても、耕作等により現在礫が失くなっているものについては認定する根拠が乏しいためこの中には入ってこない。産状から推測して、なお若干の集石炉があった可能性は否定できないことを最初におことわりしておきたい。

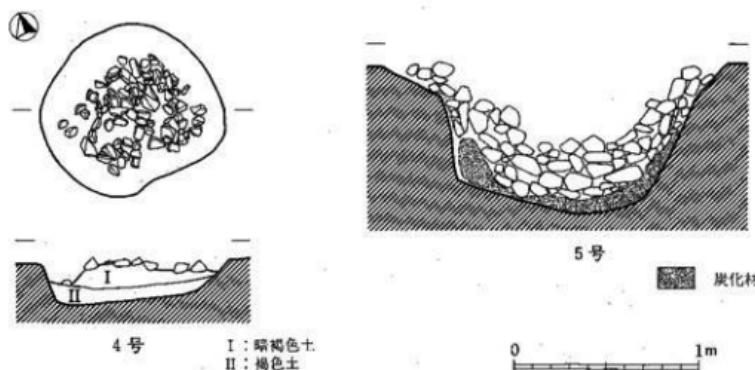
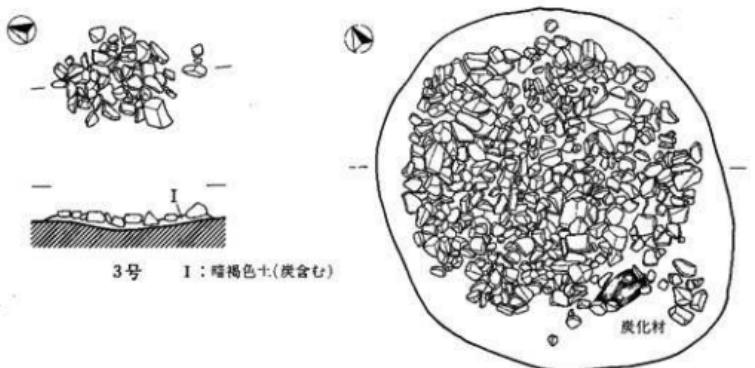
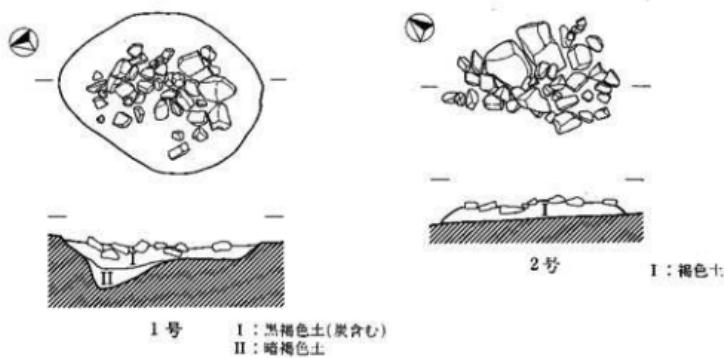
調査区内では計13基の集石炉が発見され、13号以外のものは全て調査区西側の15×11mの範囲に密集している。掘り込みについては深さ40cm前後のものが6基と最も多く、最高は5号の160cmである。また掘り込みの伴わないものもみられ（2号、3号）、集石は検出面であるローム面より若干浮いた状態にある。掘り込みの伴う11基のうち10基については礫が底面より離れて、ほぼ掘り込み面の高さに浮いた状態であるが、例外的に5号については壁から底面にかけて貼り付いた状態で産出し、集石と壁や底との僅かな隙間には炭化材がびっしり介在していた。他には1号と3号の覆土にも炭の混入が多量にみられたが、5号だけは他と比べて特異的な形態である印象を受けた。

6号と7号、8号と9号は漸り合いの産状を呈するが、別々のものであるのか、あるいは同一のものが2基に見えるのか、真相は不明である。

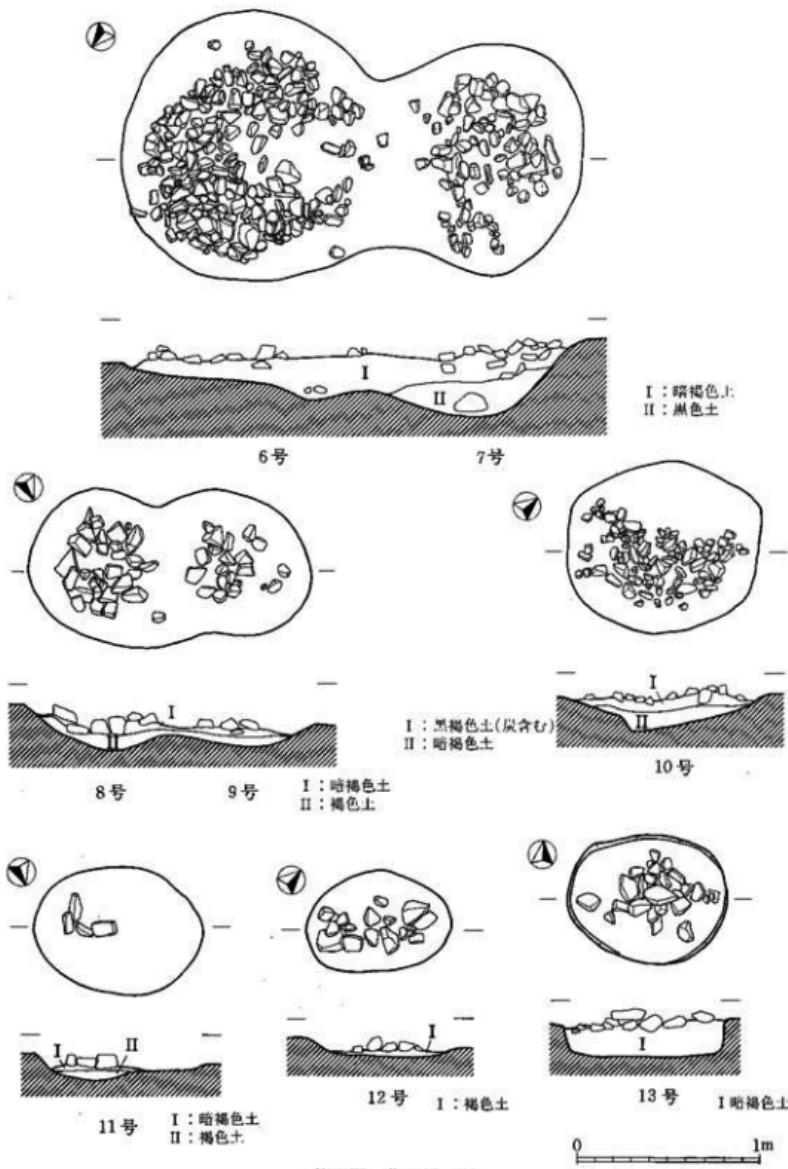
本調査区の西隣では先述したように中央道長野線関連で発掘調査が行われているが、そこでは同様の集石炉が計6基発見されている。今回のものとは最も近いもので僅か10m程しか隔たりがなく、同一グループのものとみてよいだろう。さらに一緒に発見されている住居址についても関連性が伺える。

第3表 集石炉一覧表

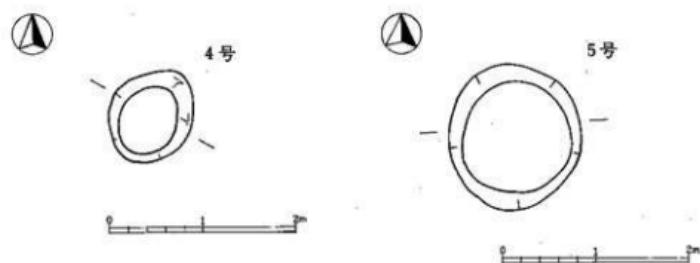
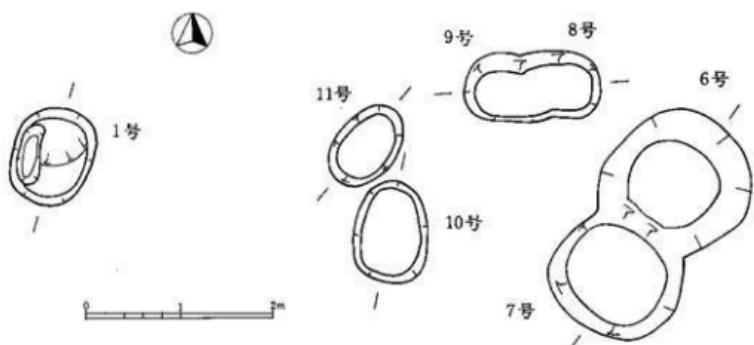
No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考
1	108×86	楕円	N-15°-E	たらい状	60×40	平担(二段)	52	覆土中に炭混入
2	95×64	楕円	N-32°-W	—	—	—	—	掘り込みなし
3	85×55	楕円	N-20°-W	—	—	—	—	掘り込みなし、炭混入
4	108×92	楕円	N-35°-E	たらい状	76×63	平担(斜)	42	
5	156×142	円	N-8°-W	たらい状	120×116	丸底	160	礫と底面の間に炭化材が介在
6	154×148	円	N-52°-E	擂鉢状	96×90	丸底	44	7号と漸り合い
7	142×130	円	N-38°-E	擂鉢状	108×90	丸底	78	6号と漸り合い
8	76×72	楕円	E-W	擂鉢状	73×50	丸底	47	9号と漸り合い
9	100×72	楕円	E-W	擂鉢状	80×48	丸底	26	8号と漸り合い
10	110×80	楕円	E-4°-E	擂鉢状	93×62	丸底	35	
11	96×66	楕円	N-40°-E	擂鉢状	74×50	丸底	28	
12	80×50	楕円	N-S	たらい状	64×36	平担(水平)	12	
13	86×76	楕円	N-80°-E	たらい状	72×60	平担(水平)	38	



第7図 集石炉 (1)



第8図 集石炉 (2)



第9図 集石炉掘り込み

第3節 小豎穴

31基検出された小豎穴は、調査区の中央部をほぼ東西全域にわたって分布しており、尾根軸部（北側）および尾根斜面部（南側）にはほとんど存在していない。検出面は他の遺構と同様、ローム面直上であるが、東側のものについては耕作による削平を受けたものが多くみられる。

規模は最大216×136cmから最小61×48cmに至るまで多様であるが、概して80~120cmの中形のものが多い。

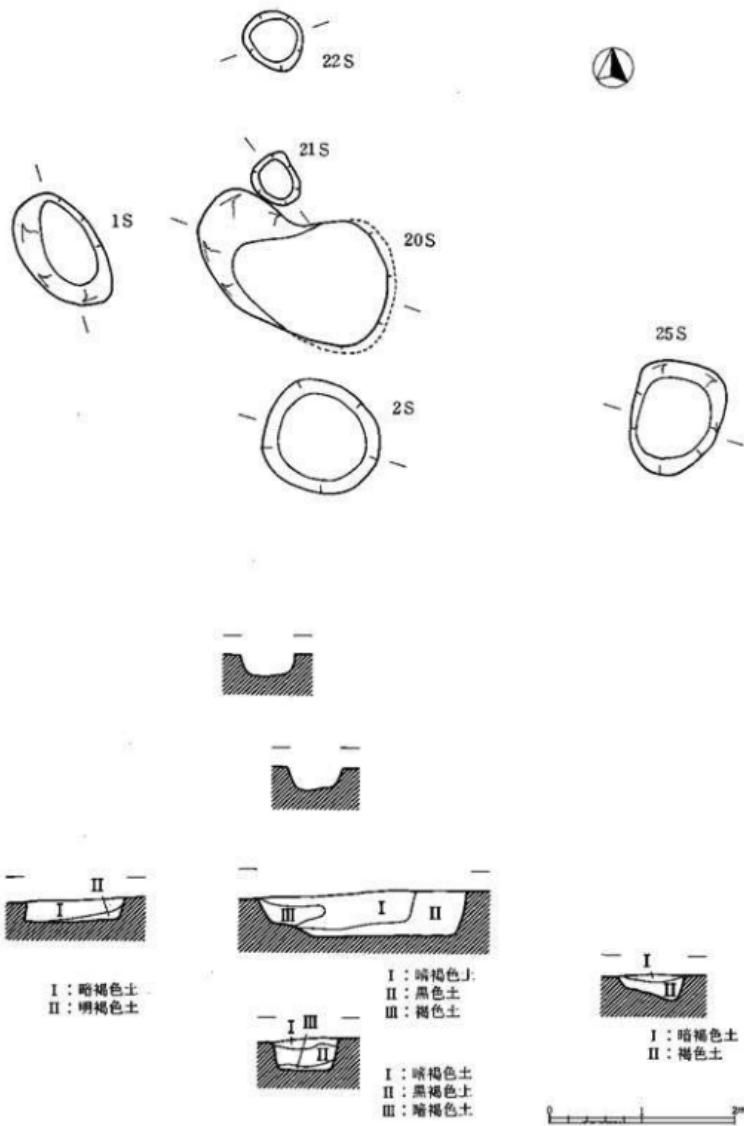
形状は平面形が円形、橢円、長橢円、不整形で、断面形はたらい状、擂鉢状のものであるが、このうち橢円形でたらい状断面のものが最も一般的である。深さも20~30cmのものが多い。

14号、15号は覆土に数個の礫が混入していた。焼成を受けたように見えなかったため、集石炉とはしなかったが、周囲の位置関係からみて可能性はある。さらに他にも31基の中には、擾乱により礫が残存していない集石炉の掘り込みであるものも混っている可能性はあるだろう。

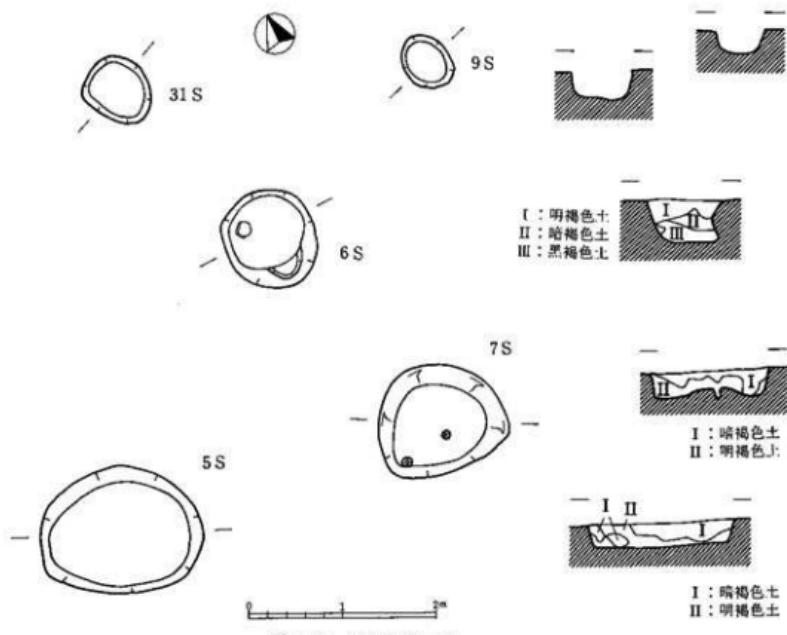
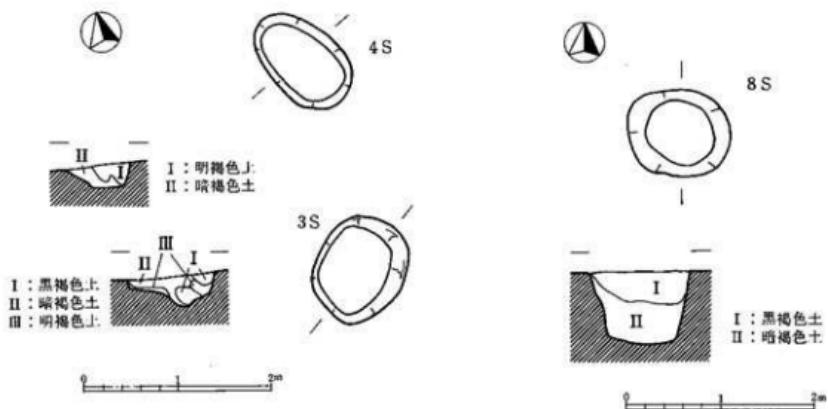
第4表 小豎穴一覧表

No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面図	底面規模	底面	深さ	備考	図版
1	134×84	長橢円	N 41°-W	たらい状	98×50	平坦	23		1
2	126×116	橢円	N-67°-W	たらい状	96×90	平坦	35		1
3	114×96	橢円	N-45°-E	擂鉢状	84×70	段々	32		2
4	122×76	長橢円	N-37°-W	擂鉢状	100×56	平坦	26		2
5	174×138	長橢円	N-70°-W	たらい状	150×112	平坦	24		2
6	110×98	橢円	N S	たらい状	82×75	平坦	44	底に大礫1個	2
7	142×120	橢円	N-73°-W	たらい状	100×85	凹内(小穴2)	26		2
8	110×92	橢円	N-19°-W	たらい状	76×62	やや丸底	77		2
9	64×50	橢円	N 21° E	たらい状	50×40	丸底	24		3
10	98×84	橢円	N-47°-W	たらい状	71×53	平坦	20		3
11	81×66	橢円	N-22°-W	擂鉢状	60×44	丸底	20		3
12	88×60	橢円	N-50°-W	たらい状	61×41	平坦	20		3
13	120×76	長橢円	N-60°-W	不整形	36×24	平坦(二段)	41		3
14	78×70	橢円	N-88°-W	たらい状	64×54	やや丸底	24	覆土に礫	3
15	72×52	橢円	N-27°-E	擂鉢状	34×34	丸底(二段)	22	覆土に礫	3
16	61×48	橢円	N-50°-E	たらい状	43×35	やや丸底	22		4
17	106×95	橢円	N-22°-W	たらい状	75×70	平坦	20	底に礫数個	4
18	94×82	橢円	N-35°W	たらい状	68×62	やや丸底	18		3
19	80×50	長橢円	N-41°-E	たらい状	54×35	平坦	12		4
20	216×136	不整形	N-61°-W	たらい状	178×142	平坦(二段)	48		1
21	56×47	橢円	N-37°-W	たらい状	42×33	やや丸底	24		1
22	68×60	橢円	N-33° W	たらい状	48×46	やや丸底	23		1

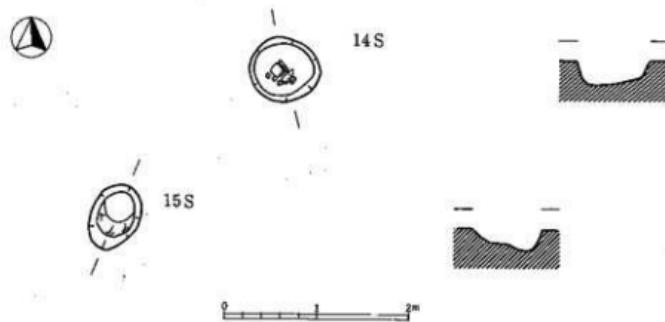
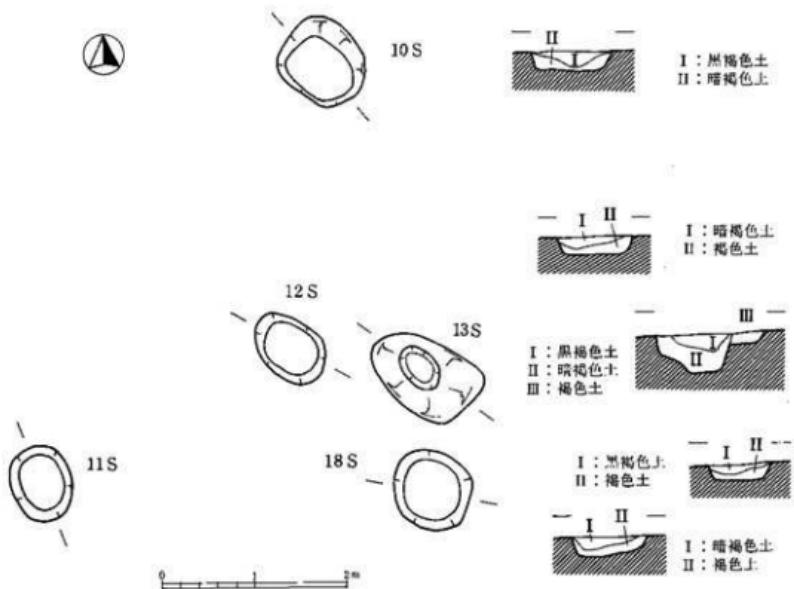
No.	確認規模	平面形	主軸方向	断面図	底面規模	底 面	深さ	備 考	図版
23	123×98	横円	N-18°-E	擂鉢状	88×76	丸底	27		1
24	112×110	円形	E-W	たらい状	88×78	やや丸底	22		4
25	122×96	楕円	N 16°-E	擂鉢状	88×75	丸底	24		1
26	80×67	横円	N-74°-W	たらい状	54×44	平坦	15		4
27	101×78	長横円	N-38°-E	たらい状	80×57	平坦	16		4
28	128×74	長椭円	N-80°-W	たらい状	102×52	平坦	18		4
29	194×24	長横円	N 84°-W	たらい状	142×90	平坦	35		4
30	17×—	円形	—	たらい状	95×—	平坦	19		4
31	77×66	椭円	N-31°-W	たらい状	62×50	丸底	30		2



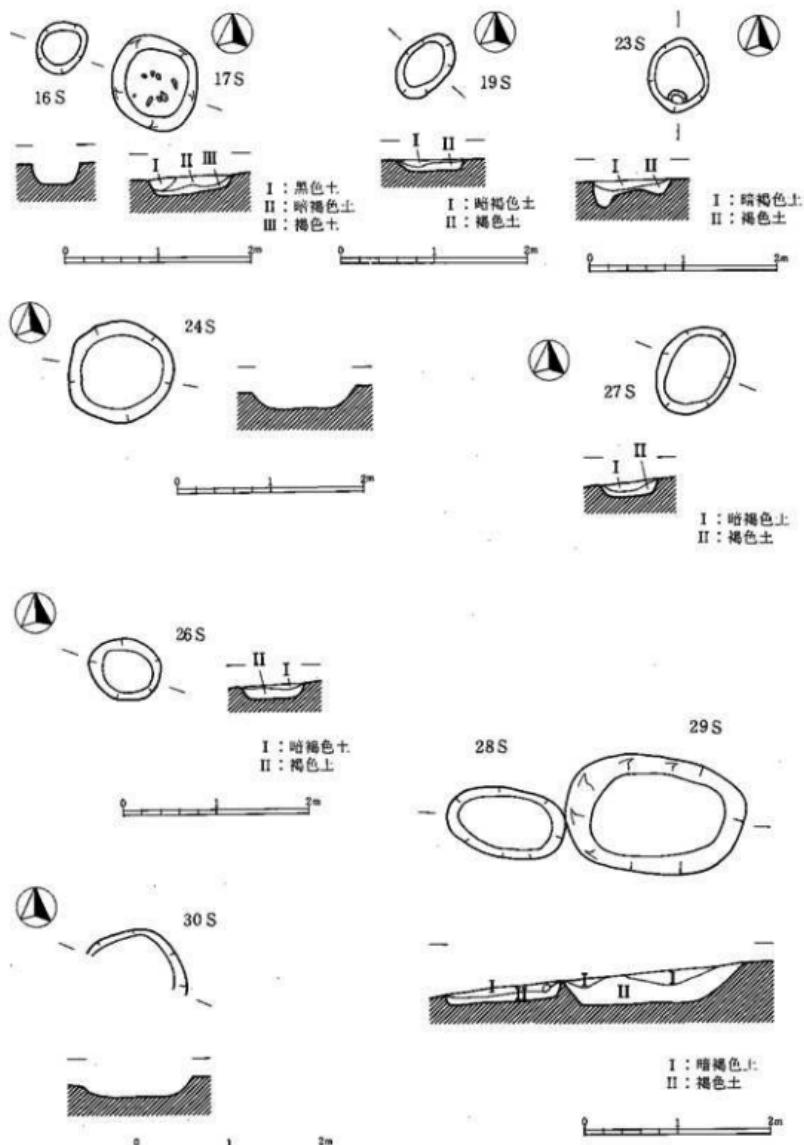
第10図 小竪穴群 (1)



第11図 小豎穴群 (2)



第12図 小竪穴群 (3)



第13図 小堅穴群 (4)

第V章 遺物

第1号住居址

遺物は、一ヶ所に集中することなく住居址裡土および床面上から出土している。土器、石器があり、いずれも小片である。

土器 出土した土器片の総数は49片で、全て5cm未満の小片である。楕円文12、格子目文14、市松文1、繩文3、撚糸文5、無文7、不明7で、不明7片を除き楕円文と格子目文が6割を占め、主体をなす。

楕円文（14図1～12）は、全面密接施文で、施文方向の分かる3では縦方向の施文が認められる。器面への押捺は弱く、不鮮明なものが多い。粒は3・4・11・12のように大粒なものと、2・8・10のような小さなものがある。色調は、淡褐色を呈する9・12の2片を除き、他は暗褐色を呈する。胎土には、比較的大粒の石英・長石・雲母・ガラスを含み、焼成は悪く、ボロボロをしている。器厚は7～10mmと比較的部厚い。

格子目文（14図13～16、15図1～10）は、最も多く出土しており、本址の中心をなす文様である。器面全面に斜位の格子目を密に施す。13～16、1～7の小さな格子目と、8～10の大きな格子目とがあり、8～10の大きな格子目は、逆楕円文といわれるものにも類似する。口縁部形態には丸味をもつ13、15、面取りをしたように角ばる14の2種がある。色調は、淡褐色の16、1、2と、暗褐色の13～15、3、6、7があり、胎土には楕円文同様に石英・長石・雲母・ガラスを多く含む。器厚は7～9mmと厚く、焼きは悪く、ボロボロともろい。

市松文（15図11）は、1点のみ出土。細かな市松文様を施す。

繩文（15図12・13）は、2片とも斜綱繩文を施し、胎土・焼成は楕円文、格子目文同様、石英・長石を含み、ザラザラした器壁を呈する。

撚糸文（15図14～17）は、縱に密接施文し、他の文様に比較し、器厚は6～8mmとやや薄く、焼成も比較的良好。内面にススの付着の認られるものが2片ある。

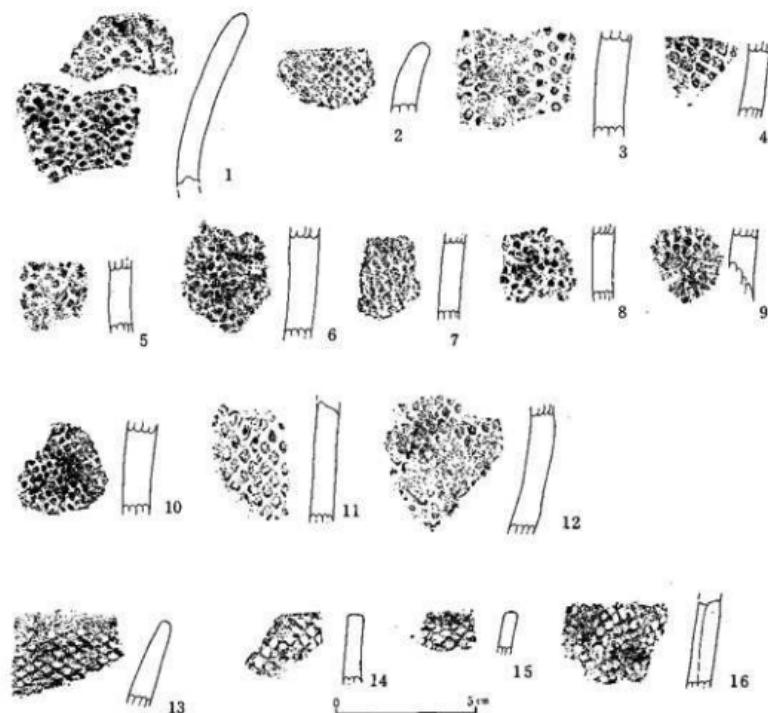
以上、1号住居址出土の土器は、立野式に比定しうるものである。山形文を含まず、格子目、楕円文を主体に、立野式の重要な要素である市松文が少ない点などを本址の特徴として把えることができる。

石器 石鎌2、不定形石器4の計6点出土したのみである。

石鎌18図1は、第一次剝離面を大きく残した三角鎌。2は、底辺を刃部に利用し、細かな使用痕が認められる。これらの他に黒曜石片が出土した。

第2号住居址

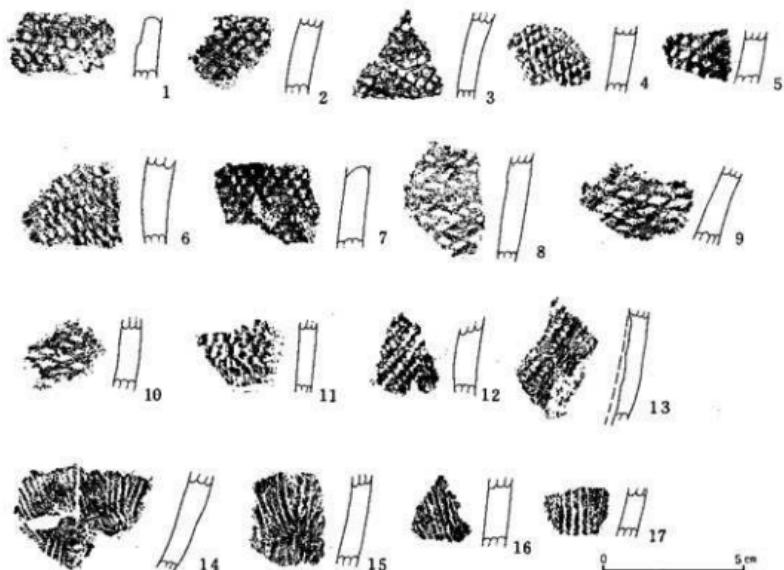
本址は、掘り込みも浅く、部分的な調査であったことも原因して7片の土器片が出土したのみであった。16図1は、格子目押型文を施したもので、器厚9mm、赤褐色を呈する焼きの良い土器片である。2、3は無文の小片。他に無文の小片3と須恵器片1が得られている。



第14図 第1号住居址出土土器 (1)

土器観察表

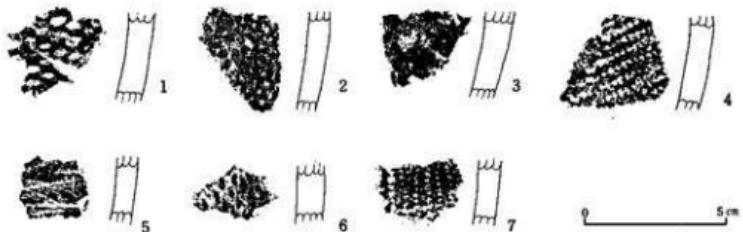
番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器内調整	胎土	備考
1	1件	深鉢	口縁	桔円押型文	ナデ	石英、長石、雲母、ガラス	床直上
2	〃	〃	〃	〃	粗	〃	〃
3	〃	〃	胴部	〃	〃	〃	床直上
4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
6	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
8	〃	〃	〃	〃	ナデ	〃	〃
9	〃	〃	〃	〃	粗	〃	〃
10	〃	〃	〃	〃	〃	石英、長英、ガラス	
11	〃	〃	〃	〃	〃	石英、長石、雲母、ガラス	
12	〃	〃	口縁	ナデ	〃	石英、雲母、ガラス	
13	〃	〃	格子目押型文	〃	〃	〃	
14	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
15	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
16	〃	〃	胴部	〃	〃	〃	



第15図 第1号住居址出土土器 (2)

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整	施土	備考
1	1住	深鉢	側部	格子目押型文	ナデ	石英、長石、ガラス	整形底
2	〃	〃	〃	〃	〃	石英、長石、雲母、ガラス	床直上
3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	内スス付着
4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	整形底
5	〃	〃	〃	〃	粗	〃	床直上
6	〃	〃	〃	〃	〃	石英、長石、ガラス	内スス付着
7	〃	〃	〃	〃	〃	〃	整形底
8	〃	〃	〃	〃	ナデ	石英、長石、雲母、ガラス	内スス付着
9	〃	〃	〃	〃	〃	〃	床直上
10	〃	〃	〃	〃	〃	〃	内スス付着
11	〃	〃	古松文	粗	〃	〃	床直上
12	〃	〃	〃	縹文	〃	石英、長石、ガラス	内スス付着
13	〃	〃	〃	然紋	ナデ	石英、長石、雲母、ガラス	内スス付着
14	〃	〃	〃	〃	〃	〃	床直上
15	〃	〃	〃	〃	〃	〃	内スス着
16	〃	〃	〃	〃	〃	〃	
17	〃	〃	〃	〃	〃	〃	



第16図 第2・3号住居址、2号集石炉出土土器

土器観察表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	器面調整	胎土	備考
1	2住		胴部	格子目押型文	外ナデ	石英、長石	
2	"		"	無文	"	石英、長石、ガラス	
3	"		"	"	"	"	
4	3住			縄文	"	石英、長石	
5	"		"	不明	"	"	
6	2号集石炉			格円押型文	ナデ	石英、長石、ガラス	
7	"		"	縄文			

以上のわずかな遺物から本址の時期を決定することは困難であるが、格子目押型文、無文土器の在り方から、1号住居址と同時期の可能性が強い。

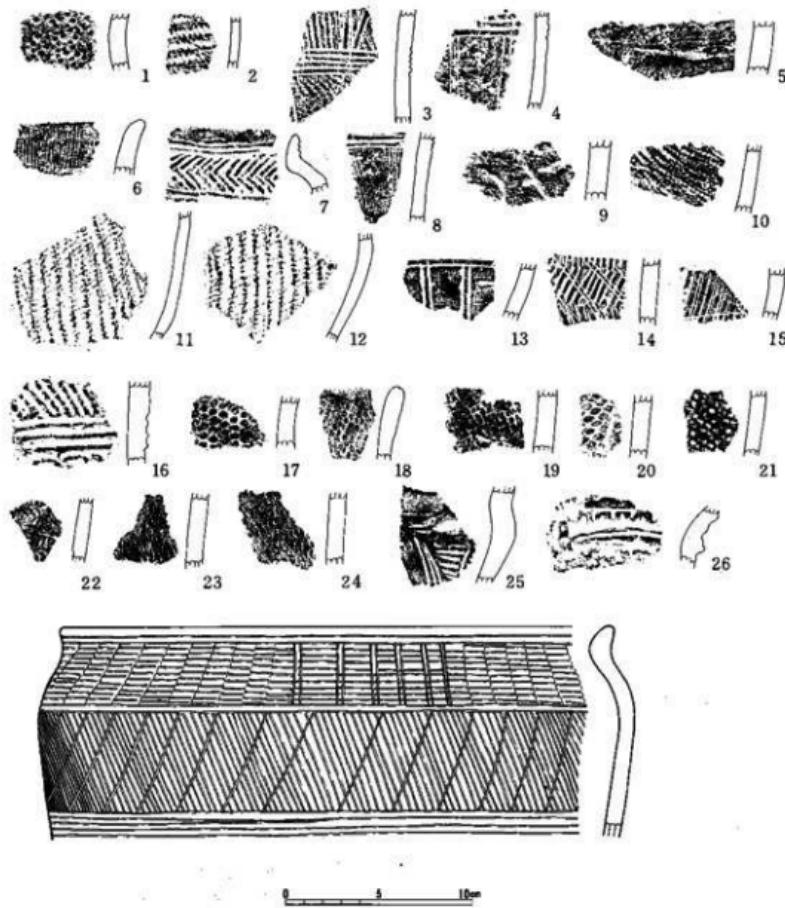
第3号住居址

本址からは、16図4、5の小さな土器片が出土したのみである。4は斜縄文を、5は条痕跡を施してあるように見受けられるが、残りの状態が悪いためはっきりしない。時期の決定は困難である。

集石炉

13基の集石炉中、遺物が出土したのは、2、3、5、7、10号の5基である。

2号からは、16図6、7と他に無文3片の5片の土器片と黒曜石片がある。6は不鮮明であるが楕円押型文を、7は縄文を施している。このことから2号は押型文期に時期を比定でき、1号住居址と同様の可能性を示唆している。3号からは、図7の石錐が出土地している。このほかに縄文文の微細片土器3も得られた。底辺にわずかな抉り込みをなした三角形錐である。5号からは、黒曜石片2が出土。7号からは、黒曜石片6が出土。10号からは、11片の黒曜石が出土。



第17図 小堅穴、遺構外出土土器

土 器 觀 察 表

番号	発掘区	器形	部位	文様構成要素	縁面調整	胎 土	備考
1	小堅穴	盃形	腹	横円押型文	ナデ	石英、長石	
2	"	"	"	繩文	"	"	
3	"	"	"	繩文、沈線	"	"	
4	6 "	"	"	沈線	"	"	
5	"	"	"	繩文	粗	"	
6	7 "	"	口縁	然紋	ナデ	石英、長石、雲母、ガラス	
7	8 "	"	"	沈線	"	石英、長石、雲母	
8	"	"	腹	"	"	石英、長石、雲母、ガラス	
9	10 "	"	"	"	粗	石英、長石	

10	15#	#	#	縄文	ナデ	"	
11	20#	#	#	"	ナ	"	
12	"	"	"	"	"	"	
13	"	"	"	沈線	"	石英、長石、雲母	
14	"	"	"	"	"	石英、長石	
15	"	"	"	"	"	石英、長石、岩片	
16	25#	"	"	"	"	長石	
17	29#	"	"	横円押型文	ナデ	石英、長石、雲母、ガラス	
18	C-4	"	口縁	"	粗	"	
19	D-9	"	"	"	"	"	
20	B-4	"	"	"	"	"	
21	D-11	"	"	格子目押型文	ナデ	"	
22	C-6	"	"	山形押型文	粗	石英、長石、雲母、ガラス	
23	B-4	"	"	然訛(?)	ナデ	石英、長石、雲母、ガラス	
24	B-3	"	"	"(?)	"	"	
25	B-4	"	"	沈線	"	"	
26	D-15	"	"	口刺突	条痕	石英、長石、雲母	
27	1小巻穴	"	口辺	沈線			

小豎穴

31基の小豎穴中、遺物が出土したのは、1~8、10、14、15、17、20、25、28、29、の17基である。

1号からは、17図1~3、21と他に少量の土器片、黒曜石片がある。27は胴上半部といふものの今回の調査で唯一形がうかがえるものである。口径29.7cmを測る深鉢形で、口縁部が内屈する。文様は半蔵竹管状工具により、口縁部は横位の格子目状に、胴上半部は斜位の格子目状に整然とした沈線文が施されている。梨久保式の前半に位置づけられよう。

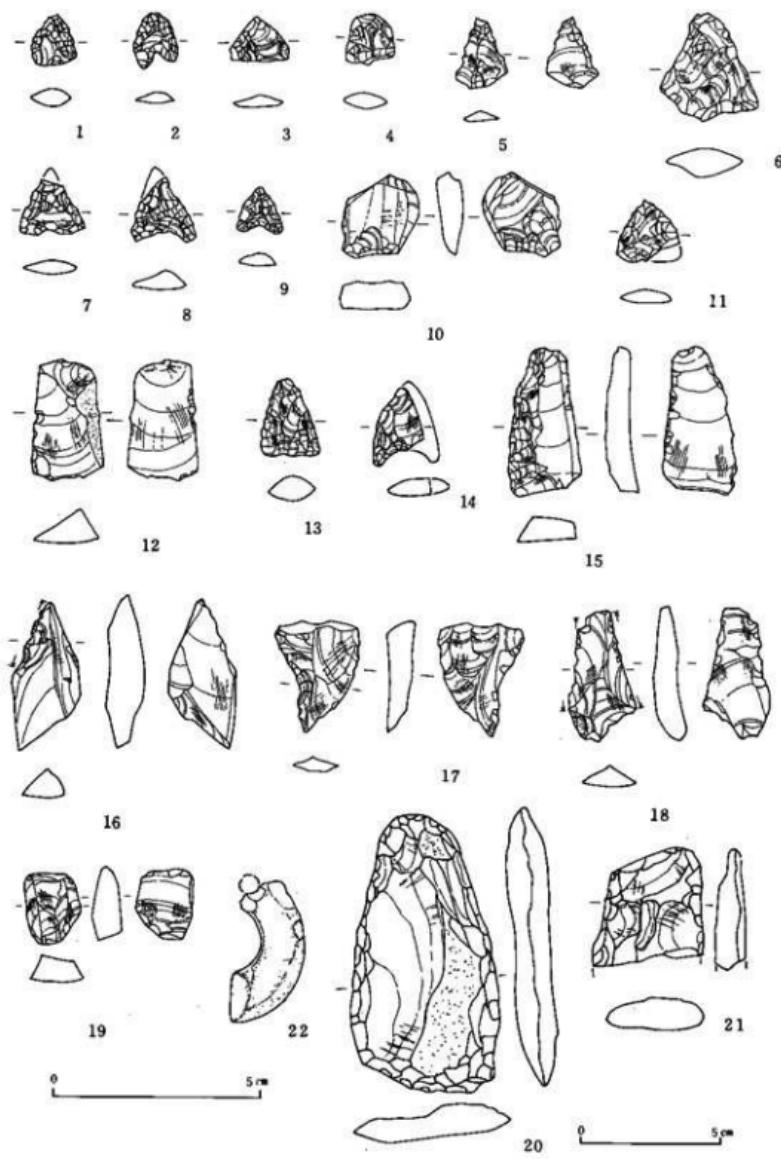
2号からは黒曜石片が、3号から縄文施文土器片と黒曜石片がまた4号からも黒曜石片が出土。

5号からは横円押型文型1が出土。6号からは、図4、5の土器片が、7号からは黒曜石片と図6の撚糸文の口縁部片が、そして8号からは7・8の中期初頭土器片と17図8の石鎌が出土している。10号からは17図9と横円押型文、網目状の撚糸文片が出土。14号からは縄文施文の土器小片と黒曜石、15号からは17図10と網目状の撚糸文、無文、縄文土器片と17図9の石鎌が出土。17号からは、撚糸文片1と無文2、黒曜石片、20号からは、図11~15の土器片、17図10のビエス・エス・キューが出土。11・12は薄手で堅い焼きの関西系土器片。25号からは17図16、28号からは無文土器片1、29号からは17図17の横円押型文が出土。31号からは、図11の石鎌、12のスクレイバーと中期初頭の沈線文施文の土器片が出土した。

小豎穴で、1号住居址と関連が求められる押型文期に比定できるものは、5、6、10、17、29の5基である。また中期初頭には、1、6、8、20、25号を考えられる。

遺構外

遺構外からは、主としてB・C-3~6区から出土している。すなわち1・3号住居址および集石炉を中心とした地域ということになる。



第18圖 出土土器

石器観察表

番号	発掘区	種別	石質	長さ(㎜)	巾(㎜)	厚さ(㎜)	重量(㌘)
1	1住	石鏃	黒曜石	15	12	5	0.8
2	"	"	"	17	13	3	0.6
3	"	不定形	"	13	17	4	0.7
4	"	"	"	14	14	5	0.9
5	"	"	"	20	15	3	0.6
6	"	"	"	31	29	8	5.5
7	3集望炉	石鏃	"	(16)	19	4	1.1
8	8小豎穴	"	"	(18)	19	6	1.3
9	15"	"	チャート	13	14	4	0.5
10	20"	ビエスエスキーユ	黒曜石	24	21	8	1.2
11	31"	石鏃	"	18	(18)	4	1.2
12	"	スクレイチャー	"	36	21	10	5.5
13	E-7	石鏃	"	22	17	8	2.4
14	"	"	"	(23)	(15)	5	1.4
15	C-4	スクレイバー	"	43	22	8	6.0
16	A-10	不定形	"	45	20	11	6.5
17	A-4	"	"	33	24	8	3.4
18	A-10	"	"	39	19	7	4.0
19	A-4	ビエスエスキーユ	"	21	17	8	2.6
20	E-6	打製石斧	夏岩	100	54	14	81
21	E-9	"	"	(44)	(40)	(12)	(25)
22		波状耳飾	ヒスイ				

17図17~22は押型文上器。17~20は椿円文、21は格子文、そして遺構内からは全く出土がみられなかった山形文22がある。23・24は網目状の撚糸文片。25は鵜ヶ島台式。26は中期土器片であろう。

石器は、土器と異なり特別な集中傾向は認められない。17図13、14の石鏃、15のスクレイバー、16~18の不定形石器、19のビエス・エス・モーユ、そして小形の打製石斧20、21である。このほかに22の抉状耳飾の残欠品がある。補修孔が穿れ、製作は粗い。

第VI章 まとめ

竜神平遺跡は過去2回の発掘が実施され、今回3回目にあたるが、その調査区域は昭和60・61年度調査区にはさまれた地区にあたっている。

これら3回の調査によれば、本遺跡は台地上および南側の台地下までを含めた東西300m、南北150mにわたる広大な遺跡で、時代も縄文時代早期、前期、中期、後期、古墳時代、平安時代の各期にわたった遺跡であることが明らかになっている。過去2回の調査では、特に、縄文早期末～中期中葉に相当する集石炉、古墳時代の農耕祭祠を示す祭祠遺物の出土などは類例に乏しい貴重な成果として注目されている。

今回の調査では、更に、これらに加えて縄文早期押型文期の集落の貴重な新例を加えることとなった。この時期の遺構としては住居址・集石炉、小豎穴がある。これらの遺構の配置は、台地の端に45m離れて1軒づつ住居が設けられ、この住居に隣接した台地中央に集石炉があり、これよりやや上方の台地中央に小豎穴が配されていた。近隣の向陽台遺跡でも住居・集石炉・小豎穴の組み合わせの集落が把えられており、当時の村の一般的な姿を示しているといえる。

住居は、全形を調査し得なかったので不明確な面もあるが、一辺3～4mの隅丸方形ないし隅丸長方形を呈するもので、内部に炉はなく、明瞭な柱穴も検出されなかった。中部高地におけるこの時期の住居址には円形、方形両系統が存するが、一遺跡内における両系統混在は稀で、本遺跡でも方形系統の村ということになる。

出土土器は、楕円文、格子目文を主体に市松文、縄文、撚糸文を伴う構成で、小片・少量であったとはいうものの一軒の住居から一括して得られたことは重要であろう。石器類には石鏃・不定形石器が数点得られたのみで、同時期の八座遺跡、近隣の向陽台遺跡に多出した特殊磨石・礫器等の石器が全くなかった点も本遺跡の特徴としてよいであろう。

集石炉について一言しておきたい。5号集石炉は、¹⁴C年代測定の結果 BC4800±110という年代が得られ、縄文前期末～中期に比定されるものであった。したがって5号は早期押型文期に属しないが、では他の集石炉も同時期とすべきか。13基発見された集石炉中、5号のみが掘り込みが深く、礫中央が壅み、木炭を多量に保有するものであり、他の集石炉とは著しい相違をなしていた。5号と同様な集石炉は、昭和60年調査の4号集石炉でも確認され、ここでは諸磯C期に比定されている。この結果は今回¹⁴C年代と集石形態の類似性から納得できるものとなっている。以上の諸点から、早期押型文期の集落を考える場合、5号集石炉は除外して考えておきたい。

以上のような成果をあげることができた今回の調査も、地主の内山勝敏氏の深い御理解と御協力なくしては遂行不可能なことであり、厚く感謝申し上げる次第である。

付章

竜神平遺跡第5号集石炉出土炭化材の 材同定および¹⁴C年代測定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 出土炭化材の樹種

1-1. 試料

試料は、5号集石炉内から採取された炭化材である。炭化材は炉を構成する礫の下層に敷き詰められたような状態で検出されており、このうち比較的大形で形の異なる材片3点を選択し、同定試料（No.1～13）とした。試料は燃料材と考えられている。

1-2. 方法

試料を乾燥させたのち木口・粋目・板目の3断面を作製、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。同時に電子顕微鏡写真図版（付図版）も作製した。

1-3. 結果

No.1, 3はコナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種に、No.2はクリに同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質を、次に示す。

- ・コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一一種 [*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sct. *prinus*) sp.]
ブナ科 No.1, 3

環孔材で孔眼部は1～3列、孔眼外で管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形～楕円形、小道管は温暖面では多角形、ともに単独。單寧孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリアラ（*Quercus mongolica*）とその変種ミズナラ（*Q. mongolica* var. *grosseserrata*）、コナラ（*Q. serrata*）、ナラガシワ（*Q. aliena*）、カシワ（*Q. dentata*）といつつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはナカラである。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・棒材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ（*Q. acutissima*）に次ぐ優良材である。

- ・クリ（*Castanea crenata*） ブナ科 No.2

環孔材で孔眼部は2～4列、孔眼外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は單寧孔をもち、壁孔は交互状に配列、

放射組織との間では棚状～網目状となる。放射組織は同性、単（～2）列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、椿木や海苔粗染などの用途が知られている。

1-4. 考察

試料は、いずれもごく最近まで炭材として重用された樹種であるコナラ節とクリに同定された。この結果を見る限り、試料が燃料材であったとする推定は支持されよう。ただし、同定対象となかった材片の中にどのような樹種が含まれているかはわからず、またその出土状況の詳細が不明であるため、確定的なことはいえない。

2. ^{14}C 年代測定

2-1. 試料

試料は、炭化材同定を行った No.1 と同一試料である。同定結果は、コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種 [*Quercus* (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) sp.] であった。

2-2. 測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

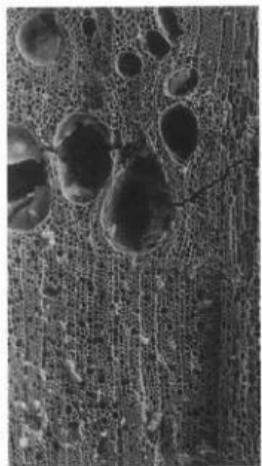
2-3. 結果

Code No.	試料	年代（1950年よりの年数）
Cak-14439	Wood charcoal from 竜神平遺跡	4830±110
	第五号集石炉 No.1	2880 B.C.

2-4. 考察

試料が採取された第5号集石炉は、考古学的所見などから縄文時代早期（押型文期）とみられていたが、過去の測定事例からみると（キーリ・武藤、1982）、今回の測定値は縄文時代前期末～中期初頭に相当すると考えられる。

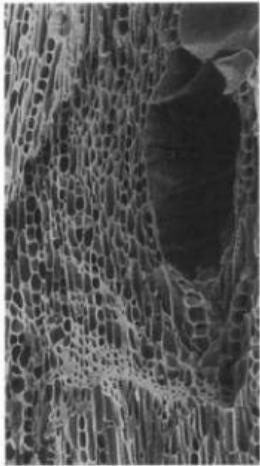
現段階でその原因については不明であるが、測定試料の採取状況、伴出遺物の確認等検討すべき問題は残される。



木口 $\times 70$

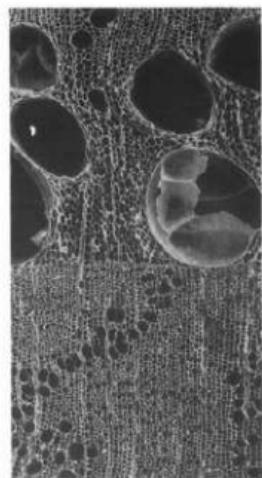


柾目 $\times 150$

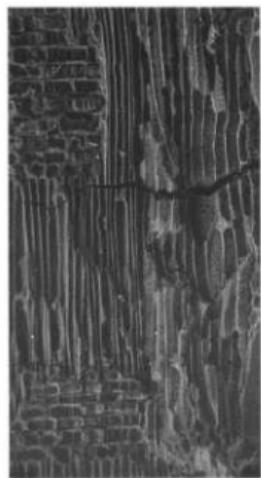


板目 $\times 150$

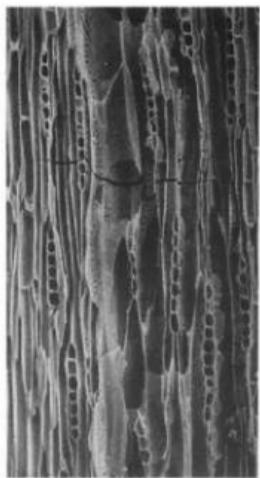
Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *prinus*) sp. No. 1



木口 $\times 70$



柾目 $\times 150$



板目 $\times 150$

Castanea crenata No. 2



道路遠景（南側から）、下方は中央道長野線



発掘前（東側から）

図版 2



遺構検出作業



グリッド設定作業

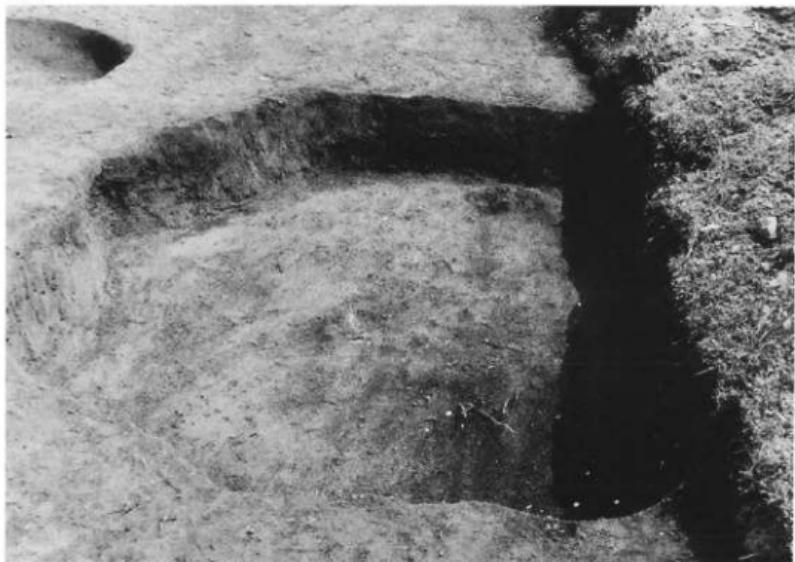


第1号住居址



第2号住居址

图版 4



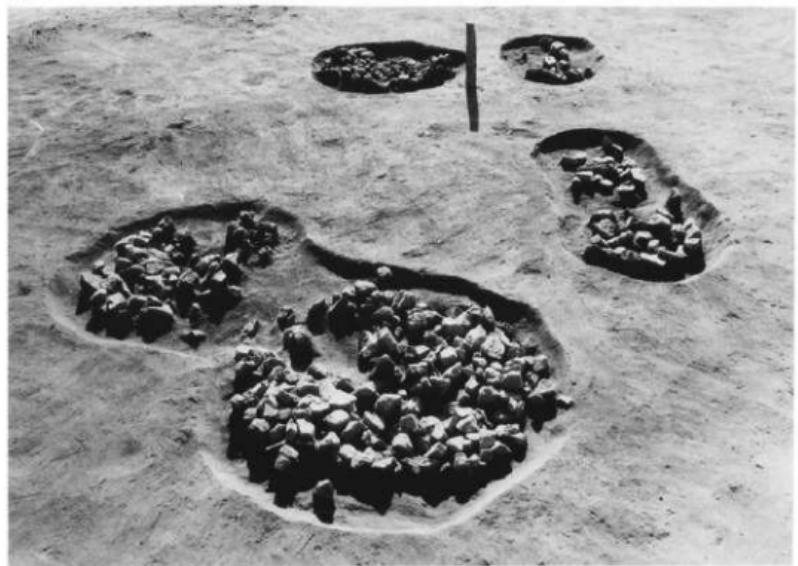
第3号住居址



第5号小竖穴



第5号集石炉



集石炉群（6～11号）

図版 6



集石炉群全景（5・12・13号除く）



調査区全景（東側から）

竜神平遺跡

——長野県塩尻市竜神平遺跡発掘調査報告書——

平成2年3月13日 印刷
平成2年3月15日 発行

発行 塩尻市教育委員会
印刷 株式会社 アート

